

# 神南地区担い手育成基盤整備事業に 伴う埋蔵文化財調査報告書

(第5工区)

只谷I・II遺跡 (Tada dani)

三部八幡下遺跡 (Sanbu Hatiman Sita)

中島下遺跡 (Nakajima Sita)

1995. 3

湖陵町教育委員会

正誤表

	誤	正
序	神戸水海	神門水海
2頁14行目	神戸水海	神門水海
25頁出土遺物2行目	突帶状に	突帶上に

## 序

この報告書は、平成 6 年度に実施された神南地区担い手育成基盤整備事業に伴い行なわれた試掘調査と発掘調査の概要を取りまとめたものです。

湖陵町は『出雲国風土記』に記されている「かみ神戸水海」(今の神西湖)を有している風光明媚な土地であり、その恩恵を古代から受けていることが分かっています。今回調査したところも例外ではなく、またひとつ歴史の一頁が書き加えられたことは非常に感銘を受けるところであります。

湖陵町では平成 4 年度から島根県の事業として圃場整備事業が始まり、昨年度は第 2 工区および第 3 工区において「三部竹崎遺跡」、「御領田遺跡」が発見され、調査が行なわれました。それらは緊急に調査を行ないましたのでその点を鑑み、第 5 工区では事前調査を実施し、その結果「保知石谷遺跡」、「姉谷恵比須遺跡」、「只谷 I 遺跡」、「只谷 II 遺跡」が発見されました。工事の掘削深度等の状況と照らし合わせて、「只谷 I・II 遺跡」を発掘調査することになりましたが、工事の途中で新たに 2 つの遺跡が発見され、緊急に調査を行なわなければなりませんでした。このような切迫した状況でしたが、無事に調査を完了できましたのも出雲農林振興センターをはじめ、島根県教育委員会、地元地権者の方々、暑い中を懸命に作業して下さった作業員の方々のご支援、ご協力の賜物であります。ここに記して厚く御礼申し上げます。

また、本書が多少なりとも地域にとっての埋蔵文化財に関する理解に役立てば幸いに思います。

平成 7 年 3 月

湖陵町教育委員会

教育長 立花重男

## 例　　言

1. 本書は、島根県出雲農林振興センターの委託を受けて、湖陵町教育委員会が平成5年度に実施した神南地区扫一手育成基盤整備事業・第5工区に伴う埋蔵文化財試掘調査とその結果を受けて平成6年度に実施した発掘調査の報告書である。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査指導　島根県教育委員会文化課

調査主体　湖陵町教育委員会 教育長 立花重男

事務局 教育課長 三原浩治、社会教育係長 春日貴絵  
学校教育係長 吉田肇、社会教育主任 林恵子

調査員 西尾良一(試掘調査)、社会教育主事 野坂俊之(発掘調査)

調査補助員 坂根健悦

調査作業員 竹下稔、林唯道、今岡年衛、前田文夫、三原真治、江角サダ子、  
五十嵐ツユ子、中尾勝子、立花満枝、江角繁子、坂根幸子、三原フミエ、  
高見与文子、春日サツ子、桑原洋子、馬庭美喜子、佐藤節子、持田八重子

遺物整理員 林良子、原照子、坂根喜世美、中尾綾子

3. 本書の執筆にあたって、次の方々にご指導、助言をいただいた。記して感謝申し上げる。

島根県教育委員会文化課、田中修、木村恒三郎、八田稔久(島根医科大学)、中村唯史(島根大学理学部)、西尾克己、内田律雄、鳥谷芳雄、林健亮、角田徳幸、宮本正保、守岡正司(島根県埋蔵文化財調査センター)、大谷晃二(風土記の丘資料館)、原裕司、柳原博英(浜田市教育委員会)、宮本徳昭(江津市教育委員会)

4. 発掘調査に際して、出雲農林振興センター、コウケン工業、地元地権者の方々に多大な協力をいただいた。また、足立正氏には様々な面で御助力いただいた。記して感謝申し上げる。

5. 掘図中の方位は「遺跡分布図」、「遺跡配置図」が国土地理院の承認を得て湖陵町、島根県農林事務所が作成したものを使用し、その他は磁北を示している。

6. 本書で使用した遺構略号はSKが土坑、SDが溝状遺構、SBが掘立柱建物跡、SCが柱穴跡、SWが柵列跡を示している。

7. 遺物の実測、写真的撮影は野坂、坂根が分担して行った。

8. 本書の執筆編集は野坂が行った。

9. 出土遺物及び実測図・写真は湖陵町教育委員会で保管している。

# 目 次

序

例言

1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 位置と歴史的環境 .....	2
3. 試掘調査の概要 .....	5
(1) 保知石谷遺跡	
(2) 姉谷恵比須遺跡	
(3) その他の地点	
4. 発掘調査の概要 .....	8
(1) 只谷 I 遺跡	
(2) 只谷 II 遺跡	
(3) 三部八幡下遺跡	
(4) 中島下遺跡	
5. まとめ .....	29

写真図版

## 1. 調査に至る経緯

平成4年度に、県営圃場整備事業として正式に始まった事業は、翌5年度に第2工区、3工区の区域を進めていた。その事業の途中に、貝塚や遺物が発見され（御領田遺跡）、事業の関係上緊急に調査しなければならず、島根県教育委員会の全面的な協力で発掘調査を行った。また、同時に三部竹崎遺跡も見つかり、遺跡登録したが、ほとんど工事が終了していたので、簡単な調査を行うこととどめることになった。ここに至る過程は非常に複雑で、当町は今までほとんど遺跡の調査を経験していないかったので、関係諸機関との協議も難航した。そのこともあって後手に回った感は否めないが、極めて少數の人によって、遺物採集が何度もなされたため、遺跡としての認識を深めることが可能になったのである。

ところで、その調査と前後して平成6年度に行われる圃場整備予定地内（第5工区）を事前に調査しておかなければならないことになり、西尾良一氏にお願いして1月から3月にかけて試掘調査を行った。調査自体は、降雪の時期にあたり、しかも作業のできる日が土曜日、日曜日に限られていたため、様々な困難があったが、合計47本もの調査トレンチを入れ、4遺跡の存在と範囲を確定することができた。

姉谷恵比須遺跡は從来から認知されていた遺跡であったが、遺跡台帳に登録されておらず、また、範囲も確定されていなかった。今回の試掘調査によってその範囲は確定し、また弥生時代前期だけでなく、縄文時代、古墳時代以降も含む遺跡であることがわかった。

保知石谷遺跡は試掘調査の第一日目の第1トレンチに木棺墓が発見されたことで始まり、上器の散布状況はもちろんのこと昔の水田の杭列なども見つかった。いずれの遺跡も圃場整備工事の掘削深度が浅く、むしろ盛土を行う個所に当たり、そのため発掘調査は行わず、調査員、および教育委員会職員の立会のもとでの工事施工が為されることになった。

只谷遺跡は遺物包含層が浅いことが判明し、また、工事掘削深度も深いことから発掘調査を行わなければならなくなり、平成6年5月9日に出雲農林振興センターと委託契約を結び、同年7月から調査を行った。そこは別の地点で、工事立会中に円形の木枠が発見されたので、工事を中止し、緊急に発掘調査を行った。それが、三部八幡下遺跡である。中島下遺跡は、その三部八幡下遺跡発掘調査中に表操作業を行ったところ、人骨が見つかり、緊急に発掘調査をしたものである。

非常に暑い日の続いた夏で、作業もままならなかつたが、11月にはすべてを無事に終了できた。これも懸命に作業していただいた方々のお陰である。

## 2. 位置と歴史的環境

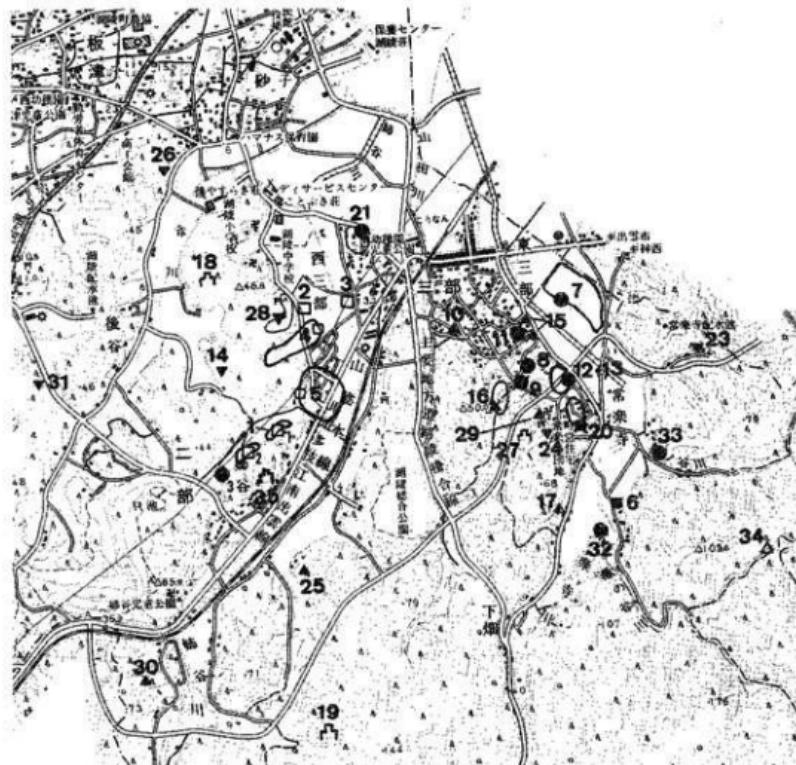
湖陵町は出雲市の西隣、神西湖の南西部に当たる位置にある。国道9号線の北側は西浜地区と呼ばれ、日本海に面しており、南側は江南地区と呼ばれ、佐田町と境をなす山々をいただく。神西湖は面積1.4km<sup>2</sup>を有し、三瓶山東側の山麓脈から流れ出た川の水を吸収し、それは湖陵町に限れば、西から後谷川、姉谷川、山田川、常楽寺川の4河川となっている。

今回調査した遺跡は湖陵町の中の姉谷川流域に当たり、今まで低地の遺跡はほとんど知られていない地域である。「只谷遺跡(1)」は、姉谷の本筋から一つ北側に位置する非常に狭い谷の南側にあり、その奥には近世になって農業用水確保のために作られた只池が存在する。「姉谷恵比須遺跡(5)」は、その只谷から姉谷川沿いに出たやや広い平野部に位置し、「保知石谷遺跡(4)」は、約100m下った西にある谷部を中心とするところにある。また、そこから50m下ると「三部八幡下遺跡(2)」があって、その上面の丘陵には八幡宮横穴墓群(28)が存在する。「中島下遺跡(3)」は、姉谷川をはさんだ反対側の水田面にあり、その丘陵上には弥生時代後期の遺物が出た中島遺跡(21)が所在する。

「只谷II遺跡(1-2)」の南側丘陵上には中世の山城である姉谷城(35)があり、三部八幡下遺跡西側の丘陵頂部にも口出城(18)が存在していたといわれるが、遺構としての跡は確認できていない。

ところで神西湖はその昔、「神戸水海」と呼ばれる大きな入海であったと考えられており、今回の調査した遺跡も多分に影響を受けているものと思われる。そのような低湿地の遺跡は、近年調査が進められており、常楽寺川流域の一連の遺跡が挙げられる。三部竹崎遺跡(7)は、標高4~6mの極めて低地に所在し、遺跡としての範囲は40,000m<sup>2</sup>以上にも及ぶ。丘陵縁辺部で縄文時代晚期の土器・石器、遺跡中央部で弥生時代前期の土器が大量に散布していた。また、古墳時代前期の土師器、中世以降の遺物も見つかっている。奥ノ谷遺跡(33)は、常楽寺川の支流奥ノ谷川と丘陵の間に非常に急峻な斜面下に位置し、縄文時代後期初頭の中津式を中心とする遺物が出土した。御領田遺跡(6)は、やはり支流である瀬の谷川の丘陵との境界部にあり、平安時代~鎌倉時代にかけての貝塚と縄文時代後期中葉の竪穴住居跡が検出された。また、この付近では奈良時代以降を中心とする土師器、須恵器の散布する滝ノ尻遺跡(32)もある。

隣接する出雲市でも低湿地の遺跡が見つかってきており、今後このような遺跡は重要視されるであろうし、新しい発見も相次ぐものと思われる。その解明は神西湖周辺だけでなく、出雲地域の古環境を知る上で非常に有益なものになると思われる。



第1図 遺跡分布図 (1 : 25,000)

#### 遺跡分布図一覧表

番号	名 称	種 別	概 要	備考・文献
1	只谷遺跡	散布地	3遺跡含む 須恵器、土師器、上師質土器、弥生土器、陶磁器、漆器、石器 須恵器、土師器、土師質土器、弥生土器、陶磁器、漆器、石器、 黒曜石、馬鹿、羽口、銅津、他	本報告書 本報告書
-1	只谷 I 遺跡			
-2	只谷 II 遺跡			
-3	只谷 III 遺跡		土師器、須恵器、土師質土器、木製品 他	平成6年試掘調査
2	三郷八幡下遺跡	散布地他	陶磁器、土師質土器、須恵器、土師器、弥生土器、繩文土器 他	本報告書
3	中島下遺跡	古墓 他	土坑墓、人骨、土師質土器、須恵器、須恵質土器、常滑?、石器	本報告書
4	保知石谷遺跡	古墓 他	木棺(箱形)、須恵器、土師器、土師質土器、陶磁器	本報告書
5	姉谷恵比須遺跡	散布地	弥生土器、繩文土器、土師器	本報告書・②
6	御領田遺跡	貝塚、集落跡	堅穴住居跡、貝塚、シジミ、ハマグリ、猪骨、鹿角製装身具、繩文土器、石器、土師質土器、須恵器、土師器	③

番号	名 称	種 別	概 要	備考・文献
7	三部竹崎遺跡	散布地他	弥生土器、興文土器、土師器、須恵器、石器、木製品、土師質土器、陶磁器、羽口、金属製品 他	⑨
8	露部 I 遺跡	散布地	貝塚、弥生土器、須恵器、土師器、ヤマトシジミ	
9	露部 II 遺跡	集落跡	住居跡?、弥生土器、石器	
10	倉造古墳	古墳	横穴式石室、直刀、須恵器 他	消滅 ②
11	竹崎遺跡	散布地	弥生土器、石斧、須恵器 他	
12	庭反 I 遺跡	集落跡	集落跡、弥生土器、土師器、須恵器 他	
13	庭反 II 遺跡	集落跡他	縦立柱建物跡、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器 他	①・②・⑤
14	松崎横穴墓群	横穴墓	3穴、須恵器	③
15	森の前古墳群 -1 森の前 I 号墳 -2 森の前 II 号墳	古墳	2基 円墳、須恵器	
16	露部古墳群 -1 露部 1号墳 -2 露部 2号墳 -3 露部 3号墳	古墳	3基 円墳 横式石棺 円墳、横穴式石室	②
17	彦の岩古墳	古墳	横穴式石室、石棺、直刀、須恵器	
18	日出城跡	城跡	山城	別名 下横越城
19	要害山城跡	城跡	山城、古鉄	④
20	常楽寺遺跡	集落跡他	縦立柱建物跡、貝塚、須恵器、土師器、石器、土師質土器、陶磁器 他	②・⑤
21	中島遺跡	散布地	弥生土器、磨製石斧、土師器 他	②
22	山田谷横穴墓群	横穴墓	須恵器	所在不明
23	ののこ谷横穴墓群	横穴墓	須恵器	消滅
24	安子神社横穴墓群	横穴墓	7~8穴以上、表人家形構造、石床、直刀、須恵器	②・⑤
25	柿本田古墳	古墳	円墳、石棺、須恵器 他	封土流出
26	水原横穴墓群	横穴墓	2穴、人骨、須恵器	
27	高丸城跡	城跡	山城	②・④
28	八幡宮横穴墓群	横穴墓	8穴確認(30穴以上有?)、家形石棺1基、直等、須恵器	③・⑧
29	西蓮寺山古墳群	古墳	2基、方墳	②
30	狩又古墳群	古墳		
31	大池横穴墓	横穴墓	1穴、須恵器	①消滅、跡 すれこ
32	滝ノ尻遺跡	散布地	土師器、須恵器、羽口	
33	奥ノ谷遺跡	散布地	興文土器	平成6年発掘調査
34	倉見谷地製鉄跡	製鉄跡	鉄滓	消滅?
35	鋪谷城跡	城跡	山城	④

## 文 獻

- ① 杉原清一「庭反 II 遺跡－昭和60年度緊急発掘調査報告書－」湖南町教育委員会(昭和61年)
- ② 杉原治一「庭反 II 遺跡－昭和61年度調査報告書」湖南町教育委員会(昭和62年)
- ③ 西尾克己・山田敏恵・守屋正司「山田西部における横穴墓の様相」『町誌研究1』(平成4年)
- ④ 山根正明「湖南町と周辺の中世城跡について(1)」『町誌研究2』(平成5年)
- ⑤ 西尾克己・守屋正司「常楽寺遺跡と庭反 II 遺跡の性格について－出雲西部出土の中世陶器を手掛かりとして－」『町誌研究3』(平成6年)
- ⑥ 門脇俊彦はか「『さんいん』古代史の周辺」山根中央新報社(昭和55年)
- ⑦ 丹羽野裕「鳥取県埋蔵文化財調査報告書 第XⅧ集」鳥取県教育委員会(1992)
- ⑧ 近藤 正「鳥取県埋蔵文化財調査報告書 第I集」鳥取県教育委員会(昭和44年)
- ⑨ 角田徳幸はか「神南地区良質埋蔵古物系に伴う埋蔵文化財調査報告書(鈴置田道路・三郎竹崎遺跡)」湖南町教育委員会(1994)

### 3. 試掘調査の概要

平成6年1月15日から開始された試掘調査では、圃場対象面積15haに対して、計47本の調査トレンチを設定、調査した。遺構、遺物を検出したものはそのうち15本に及んでいるが、遺跡登録したものは、「只谷Ⅰ遺跡」、「只谷Ⅱ遺跡」、「姉谷恵比須遺跡」、「保知石谷遺跡」の4遺跡で、前2者は発掘調査を行った。以下に試掘調査のみを行った遺跡について概略を述べたい。

#### (1) 保知石谷遺跡

保知石谷遺跡は、湖陵町大字三部1096-2、1075-1・3、1082-1・3番地付近に所在する。姉谷川河口から約1km上流の西側の小さな谷があり、そこに住まいされる家の屋号は保知石屋と呼ばれ、その谷と姉谷川筋に出た平野部の一部が遺跡となっている。標高は平野部の低いところで4mを測り、谷部は6~9mを測る。

S T 1 トレンチから箱形の木棺墓が検出され、長軸188cm、短軸128cm、深さ30cmを測る。蓋板と底板は2枚使用し、側板、小口板は1枚であった。土圧によって蓋板が陥没しており、一方の小口板が波状に変形していた。蓋を取ると中に人骨があり、頭を北西に向かって埋葬してあったが、詳細に見ると骨を後から並べたように見え、改葬墓の可能性が高いものと思われる。暗褐色粘質土の掘方が明瞭に観察できたが、木棺墓内も周囲も遺物は出土せず、時期決定はできなかった。ただ、木棺や人骨の遺存状態から江戸時代を遡ることはできないものと思われる。

S T 2 トレンチからは土坑が検出され、中から木質片が多量に出土した。その状況からこれも近世の墓ではないかと思われる。周囲から瓦片と陶器片が出土したが、時期は明確にできない。

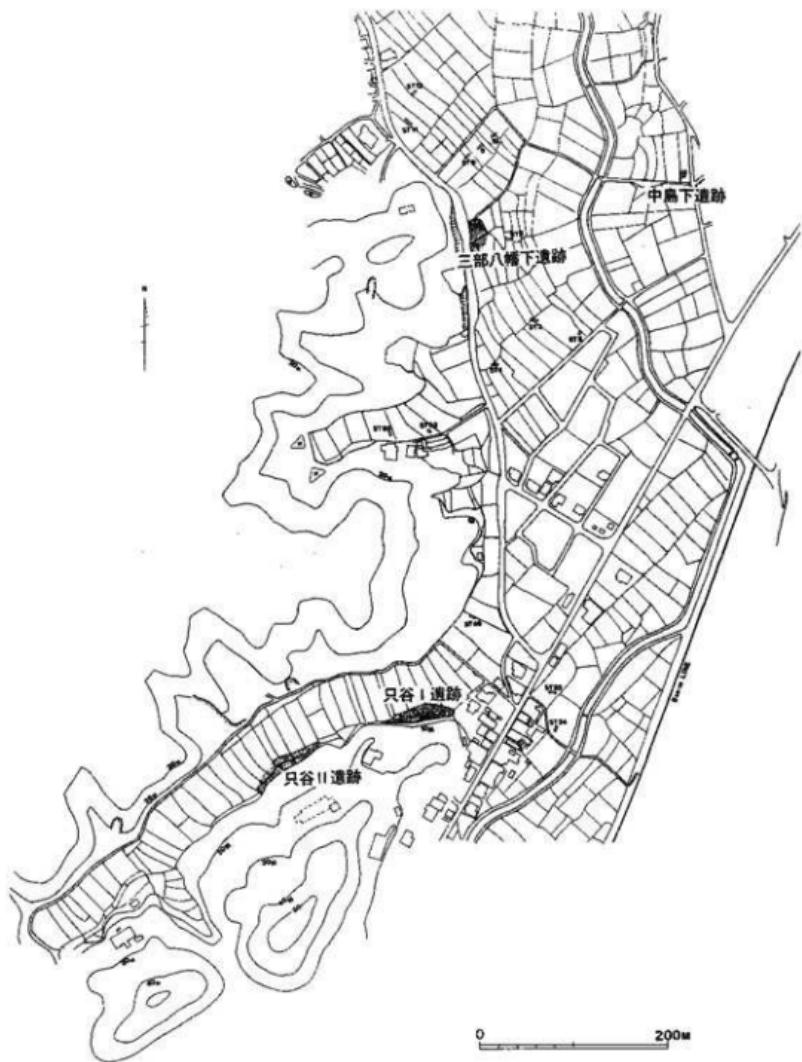
S T 3 トレンチからは旧水田跡と思われる杭列などを検出し、陶磁器なども出土した。この杭列は姉谷川に平行して築かれており、護岸的な役目をもつ強固な造りとなっている。

S T 50+52 トレンチからは古墳時代後期から平安時代にかけての須恵器、土師質土器や瓦器類が多量に出土した。その中には、底部回転糸切り未調整の壺や輪状つまみの蓋、叩き目のある壺片などがあるが、そのほとんどは摩耗が激しく、また小片のため、図示しなかった。

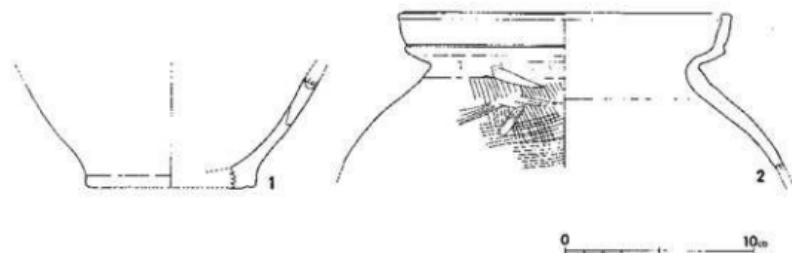
#### (2) 姉谷恵比須遺跡

姉谷恵比須遺跡は、保知石谷遺跡の南約300mの西に続く只谷から出た平野部にあり、湖陵町大字二部1000-1、1001、827-1番地付近に所在する。圃場整備前の水田標高は6.6~7.3mで、姉谷丘陵の突端先に当たる。この遺跡は十数年前、民家の井戸を掘った際に、弥生時代前期の壺形土器が出土<sup>注1</sup>していたが、遺跡として登録されていなかったものである。

遺物が出土したトレンチは第2図のS T 33、34、46で、S T 33からは縄文土器が、S T 34からは土師器などが出土した。トレンチの掘削深度は平均して約2mで、いずれのトレンチも地山まで到



第2図 調査位置図



第3図 姉谷恵比須遺跡出土遺物

達せず、ST33は2.8mも掘削した。遺物包含層は総じて暗褐色粘質土で、やや青味がかっている状態であったが、これは常に地下水に没かり、還元状態にあったことを示している。遺物包含層のレベルはST33が表上下2.2m、ST34が1.1m、ST46が1.75mであった。

第3図の1は、ST33から出土した縄文上器の深鉢の底部で、推定底部径8.8cm、底部は厚く、体部は薄い。胎土は石英を中心に砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で、淡黄褐色を呈している。調整は内外面ともに摩耗が激しく不明である。御領田遺跡出土のものと類似しており、後期の所産と思われる。2は、ST34から出土した土師器の甕で、古墳時代前半期後葉に比定できるものである。<sup>注3</sup> 口唇部は上面に凹線、口縁部は複合口縁である。口縁部はナデ、胸部の頸部付近は縦位に、その下半は横位に刷毛目を施し、内面は押さえと不整方向の簡単なナデが施されている。細砂粒を含み、焼成はやや軟質で、淡黄褐色を呈する。口径は推定で17.2cm、頸部径は14.3cmを測る。ST46からは土師器、須恵器、土師質土器が出土し、その他に縄文土器らしいものも見つかったが、いずれも摩滅が著しいためはっきりしない。これが出土したのは暗褐色粘質土の下の砂層で、木片なども見つかっていることから上流からの流れ込みであろうと思われる。

### (3) その他の地点

ST12は、水田標高4.4~4.7mで、1.3mほど掘削した。底部回転糸切り未調整の土師質土器と陶胎染付が出土した。ST11は、水田標高4.75mで、耕作土を剥いだ下から須恵器片が出土した。地山面まで約1m程であったが、地山付近からの出土はなかった。ST8、9、10は、標高4.0~4.5mの位置にあり、1.1~1.2mほど掘削した。3トレンチ共に小片の須恵器片が出土したが、叩き目のある甕片であるもの以外時期の根柢となる情報は得られなかった。

ST5は、三部八幡下遺跡に近接しているが、遺構は検出されず、近世と思われる陶器片と土師質土器が出土している。水面面の標高は4.36mで、トレンチの深さは1m程である。三部八幡下遺跡の調査では、須恵器片が大量に見つかっているが、ここでは見られなかった。

## 4. 発掘調査の概要

### (1) 只谷Ⅰ遺跡

只谷Ⅰ遺跡は、湖陵町大字二部831-1、835、832、843-1番地に所在し、圃場整備事業前の旧水田面の標高は、8.20m～8.76mにあたる。只谷は姉谷川河口から1.3km上流に遡った位置の西に細長く伸びた谷で、幅は60m、長さは約600mの奥行きがある。奥には近世になって人工的に作られた只池があって、それを含めると奥行き1kmにもなる。この谷の南側丘陵に沿って他の水田面とは違う段状の水田があり、その東側をⅠ、西側の部分をⅡとして区分している。只谷Ⅰ遺跡の場合、低位水田との段差は約40cmである。

#### 調査区の設定

この部分に試掘調査では、3本のトレントを入れている。第4図は調査区設定図であるが、西からST 4、5、6のトレントが試掘調査の際に入れたものである。いずれのトレントからも表土下40～80cmの位置で、須恵器と土師器が多数出土した。

調査対象地は、東西に長さ約70m、幅は最大で約16mをもっており、丘陵にはほぼ平行に、磁北に対して81.6° 東に振っている調査軸を決め、5m四方のグリッドを設定した。グリッドは長軸に西から0～10、短軸に南からa～cと設定、耕作土を約15cmほど重機で剥いだ後に手掘による発掘調査に入った。10グリッドの東側の部分は圃場整備対象外になり、調査を行わなかった。

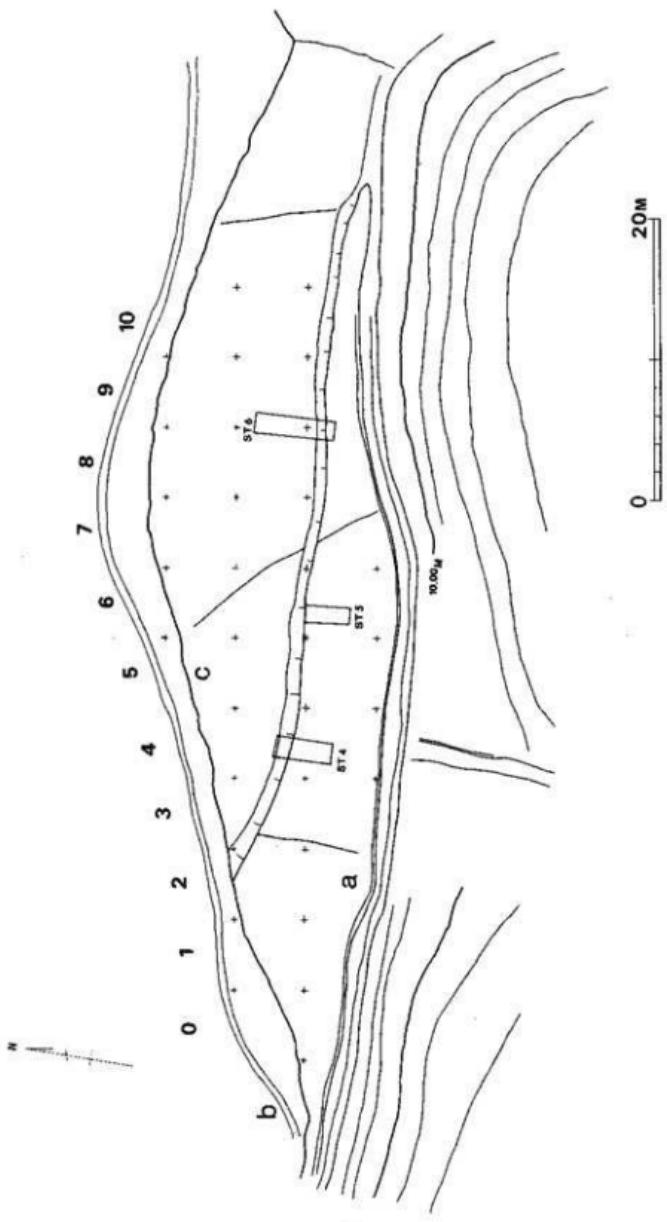
#### 土層状況

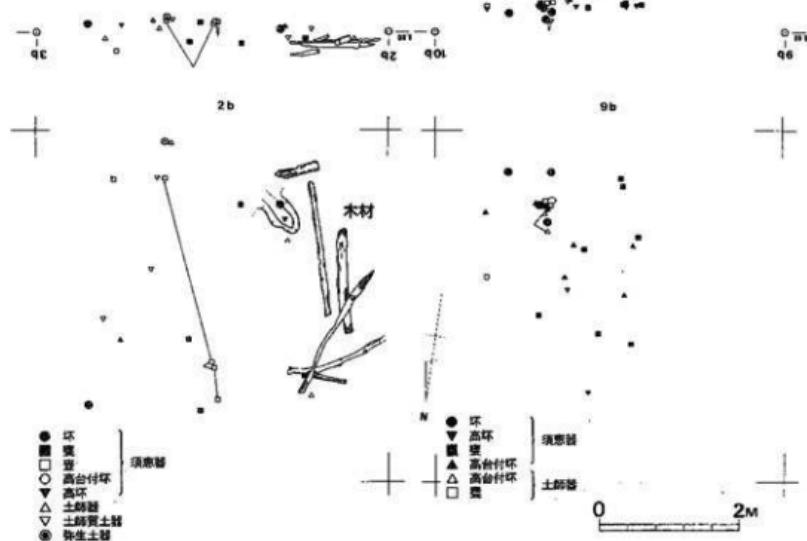
山際であるa軸は、表土下80cmで地山に到達するところもあったが、4、5ラインではまったく地山面を検出できなかった。この地山は還元作用によって青灰色を呈しており、粘質度の強いもので、この地域一体に広く分布する布志名層<sup>註4</sup>と思われる。a軸から北に行くにつれて、つまりb、c軸になると地山は急激に深くなり、T事による掘削深度以下になるので調査を行っていない。試掘調査の際の各トレントの状況では、ST 6の中央部、9bグリッド西面では表土下1.2mの位置で地山を検出している。しかし、ST 6北面になると検出できていない。

ST 4は、表土下3mも掘り下げたにもかかわらず地山に至っていないが、3～5のラインは南側丘陵が谷部になっており、そのために非常に深くなっている。第6図は、4b～6b南面の土層状況を示しているが、ST 4の位置で堆積状態が平行でなくなっていることに気付く。8層は、暗茶褐色木質土で、粘性が強いものであるが、これからも谷部に溜った木材などが、常態の地下水によって腐食しなかった状況を表している。

遺物包含層は、4・5・6層で、6層よりやや明るい3層にも若干の遺物が認められた。9層は8層よりやや薄っぽい木質土層で、遺物の痕跡はまったく見られない。この遺物包含層のレベルは

第4図 只谷1遺跡調査区配置図





第5図 2-b, 9-b グリッド遺物出土状況

標高7.5~8.1m内に収まり、状況は他のトレンチでも同様である。

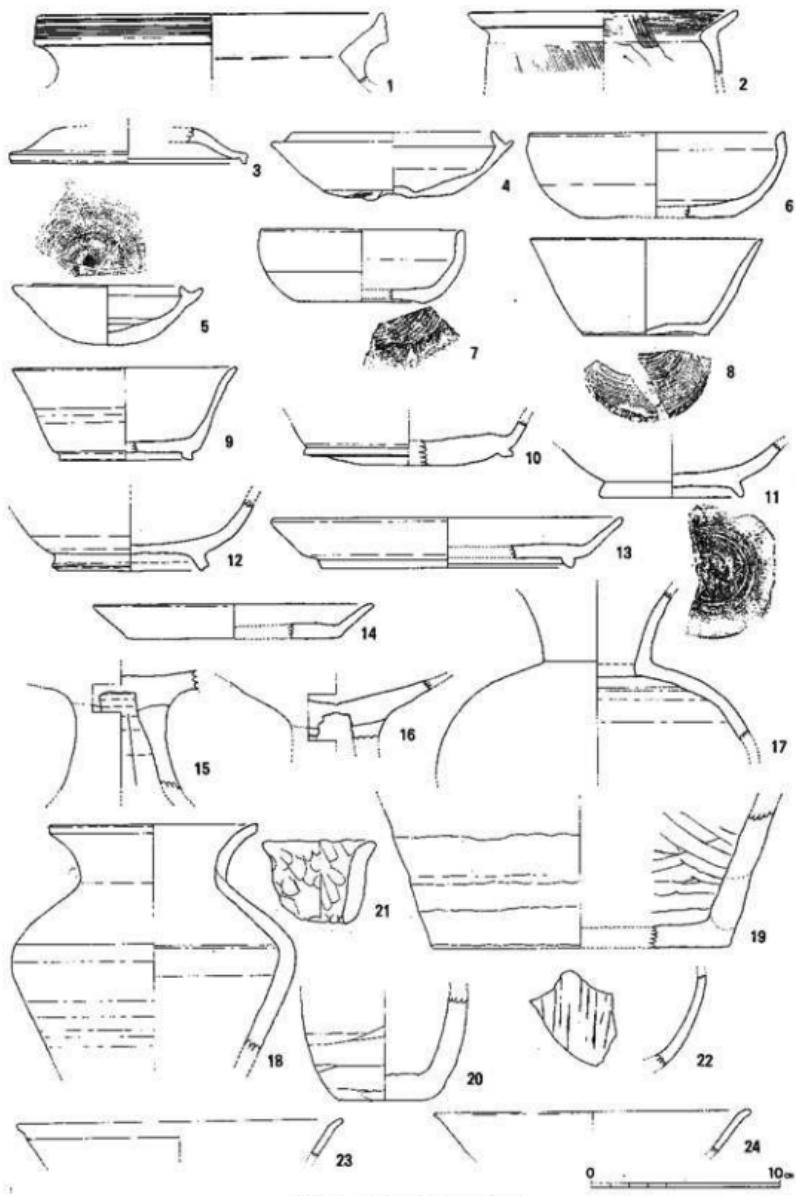
#### 遺物出土状況

遺物の出土状況は、南北ラインで、a軸では浅く、c軸では深い位置からの出土となっているが、bとcは平行的な分布が見られた。量的に見ると、a、b軸は多く、c軸になると激減したが、このことは遺物が南側丘陵上からの流れ込みであることを物語っていると考えられる。

第5図は、代表的なグリッドを示しているが、2-bグリッドは西側で地山風化土が厚く堆積しており、東に行くにつれて深くなっている。その地山風化土の上面に薄い砂層と共に木材が堆積しているところがあり、この砂層は南側丘陵からではなく、谷奥部から来ていることが観察できた。遺物



第6図 4b-6b 土層状況



第7図 只谷I遺跡出土遺物

のほとんどはこの砂層下の粘質土から出土している。出土した遺物は、須恵器を中心として、土師器、上師質土器、弥生土器が見られ、層序的、レベル的に時期差はほとんど確認できず、混在している様相を呈する。しかし、土師質土器は層序的にやや上のレベルの傾向が見られる。

9 b グリッドでは須恵器の出土が甚だしく、土師器は少ない。2 b グリッド同様に、層序的、レベル的な時期差は看取ることができない。これは貝谷 I 遺跡に共通した状況で、丘陵上に存在した複合的な遺跡から一定の短期間に流れ込んできたのではないかと思われる。また、1~5 ラインには土師質土器が見られるのに対し、6 以降のラインではほとんど見られなくなり、弥生土器は 8 以降のラインに集中して見られる。

#### 出土遺物

出土遺物の器種としては、須恵器の壺、蓋、高台付壺、甕、壺、高壺、土師器の壺、蓋、高台付壺、甕、土師質土器の壺、高台付壺、弥生土器の甕などのほかに、青磁、白磁、瓦器の擂鉢、漆器椀（6 b グリッド）、須恵質の土器類、寛永通宝などが出土している。

第7図は、出土遺物をまとめたものである。1は弥生時代後期の甕、2はフォルム的には弥生土器のようだが、内面をヘラ削りしていることから土師器と判断した。口縁部内面は横位に、胴部外面を縦位に粗目の刷毛目を施す。21は土師器の手捏ね土器で、瓶を模しているようである。

3~20は須恵器で、3は蓋である。口縁端部を垂下させ、右回転調整である。4・5は壺身で、4は底部の切り離しに失敗し、難にナデしているだけである。口径10.7cm、器高3.6cm。5は底部切り離し後難にナデ、内面に「×」のヘラ記号をもつ。器高3.2cm、推定口径7.9cm。6~8も壺で、6は底部ヘラ切り後不整方向にナデしていると思われ、焼成はやや軟質である。7・8は底部回転糸切り未調整、推定口径7は10.6cm、8は12.2cm、器高7は3.9cm、8は5.2cmである。9~12は高台付壺で、いずれも切り離し後ナデを施す。11はヘラ切りを行っており、内面は軽く横位にナデしている。10は底部が厚く、高台の意味を失っており、壺の可能性もある。13は台付の皿で、推定口径18.6cm、器高2.7cm。14は皿で、推定口径14.7cm、器高1.9cm。いずれも底部切り離しは不明である。15・16は脚内面に貫通する2孔1対の切れ込みを持つ高壺で、回転ナデ調整を行っている。17~20は甕。17は頸部径5.7cm、外面に自然軸がかかる。18は最大幅付近以上を丁寧な回転ナデで仕上げており、推定口径10.9cm、最大幅15.1cmを測る。19は推定底部径15.8cmで、粘土積み上げ痕が明瞭に残っている。焼成が悪く、灰白色を呈する。20は外面横位のヘラ削りの小型甕で、底部径4.9cm。底部内面を工具で削り出しが、難である。

22は中国製青磁で、椀の底部付近である。外面に線刻の連弁文が見える。23・24は中国製白磁の皿で、23は口縁部外面に界線があり、推定口径17.2cm。24は推定口径16.4cmを測る。大宰府編年などから、青磁は16~17世紀初頭、白磁は12世紀代のものと思われる。  
注5  
注6

## (2) 只谷Ⅱ遺跡

只谷Ⅱ遺跡は、只谷Ⅰ遺跡の西南西70mの段状をなす水田にあり、湖陵町大字二部861-1、862-2付近に所在する。南側は段状に加工を受けているなだらかな丘陵があり、昔は水田、畑として利用されていた。その丘陵は標高56mの頂上で、ここには中世の姉谷城跡があったことが知られている。<sup>注2)</sup>水田面の標高は圃場整備事業前で、東端が9.92m、西端が10.5mあり、北側低位水田面との比高差は20~40cmである。

### 調査区の設定

2段に渡る段差の上面を調査対象地とし、北側水田は工事掘削深度以下であるので調査区外とした。東西の長さ85m、南北の幅は最大で15mを測るもので、西端段部を基本的な軸として、第8図で示しているように、5m四方のグリッドを設定した。この基本軸は磁北に対して57.4°東に振る計算となる。工事で東側の丘陵を削平する予定で、ここにはトレンチを設定した。グリッドは、長軸に西から0~16、短軸に北からA~Eと設定したが、丘陵部トレンチは設定グリッドと一致していない。

試掘調査によって、3本のトレンチが、東からST1・2・3と設定され、いずれのトレンチからも須恵器を中心に多数の遺物を検出した。耕作土を約15cm重複で剥いだ後、手掘による発掘を行った。また、遺跡の広がりを把握するため、範囲確認のトレンチをHT1~3まで設定し、調査した。その結果、いずれのトレンチからも遺物が出土した。さらに、調査区外東側で遺物を表探したため、HT4として確認を試みたが、まったく遺物を検出できなかった。

### 土層状況

土層の堆積状況は、只谷Ⅰ遺跡のように単純ではなく、やや複雑であるが、山麓面の状況は単純である。第9図の15Eグリッド南面が山麓の状況を表している。1層の暗灰茶褐色砂質土は耕作土と思われ、2層は粘質土であるが、様々な土の混在した様子が観察でき、後世人的に入土されたと考えられる。実際、地元の方の話によると水田が非常に軟らかいため、何度も土を入れたそうである。

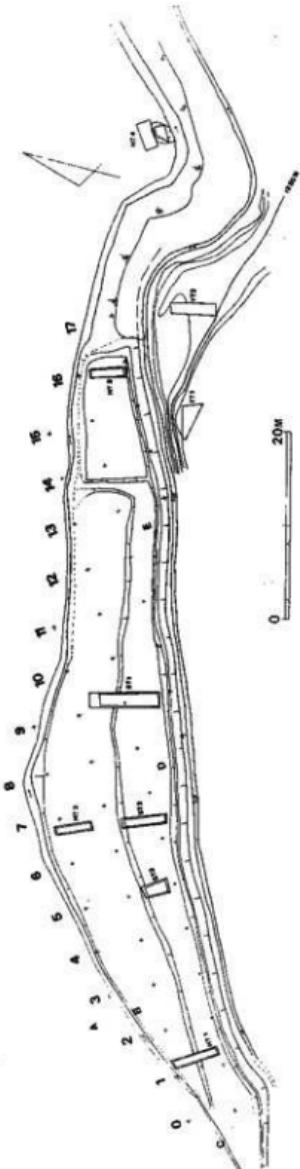
試掘トレンチの上層図(ST1)では、0層が耕作土で、1層が床土と思われるが、2層にも他の土の混入が観察でき、人為的であると思われる。遺物は2層の下層以下3層を中心とし、これに張りつくように遺物があるところもあった。5層は砂質土で、範囲確認トレンチ(HT2)でも確認したが、これ以下には砂層が複雑にかみ合っており、無遺物層である。2Cグリッド南面の土層も複雑であるが、所々砂層が入り込んでいて、水の流れを受けているように見える。これらは谷奥からの水の影響と考えられる。

再び15Eグリッド土層図を見ると、ここは須恵器壺片が大量に出土したグリッドで、他には見られない現象であったが、<sup>注8</sup>土層堆積も例外的に流砂の影響を受けていないことがわかる。7・8・10層はおそらく天地換えなどが為されたことによってできたものと思われ、9層以下には遺物が密集していた。9層上面からは近世のものと思われる陶磁器が出土したが、下層以下は須恵器、土師質土器以外の出土が見られない。しかし、下層の状況も自然堆積の様子をうかがえず、遺物の年代差を把握できない。また、5・9層上面の凹凸が不自然で、耕削の跡のような印象を受ける。これらのことから判断すると、只谷II遺跡は耕作前に、軟弱な地盤を改良するため、上面にある丘陵を削平して、次々と土入れを行ったと考えられる。それは、丘陵トレンチ（T1・2）では、表土下すぐ地山になり、遺物も摩耗した小片が数片しか得られなかったことからも判断できるであろう。

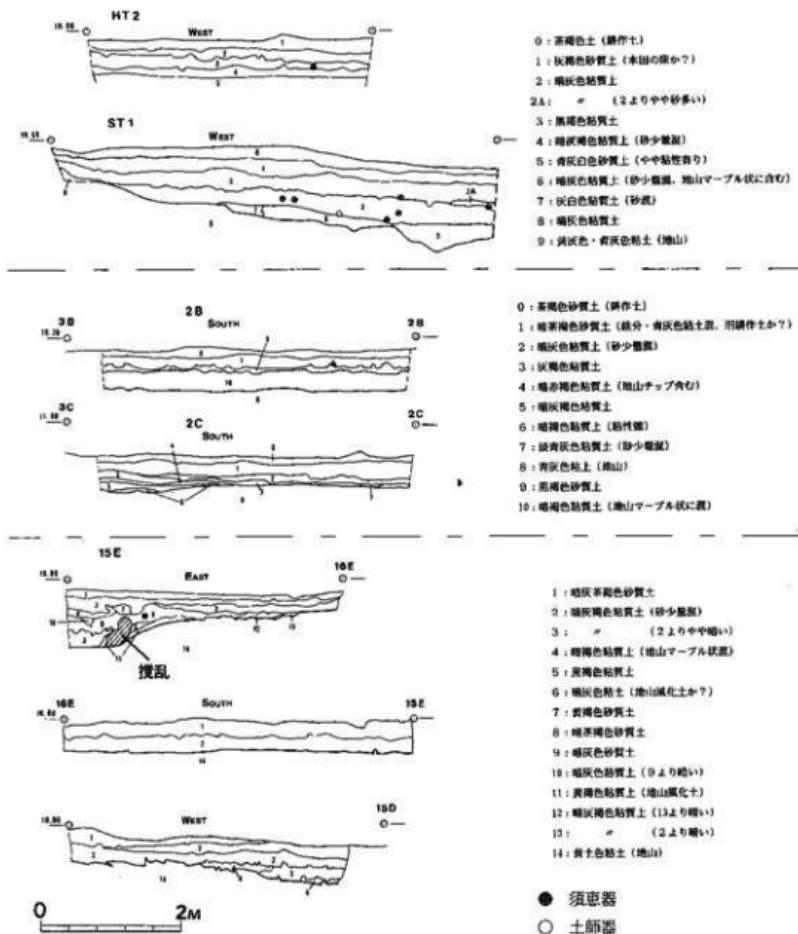
換言すると、出土した遺物の大半は丘陵上にあった遺構から後世人為的に排出されたもので、そのほとんどが壊滅状況にあると思われる。

#### 遺物出土状況

遺物の出土状況は、段状になっている水田全面に広がっているが、グリッドによって多少の違いが認められる。調査区の西端に当たる0・1の軸は出土数が少なく、また近世と思われる陶磁器片の出土が多いが、2の軸以降になると出土数は急増し、須恵器の割合が



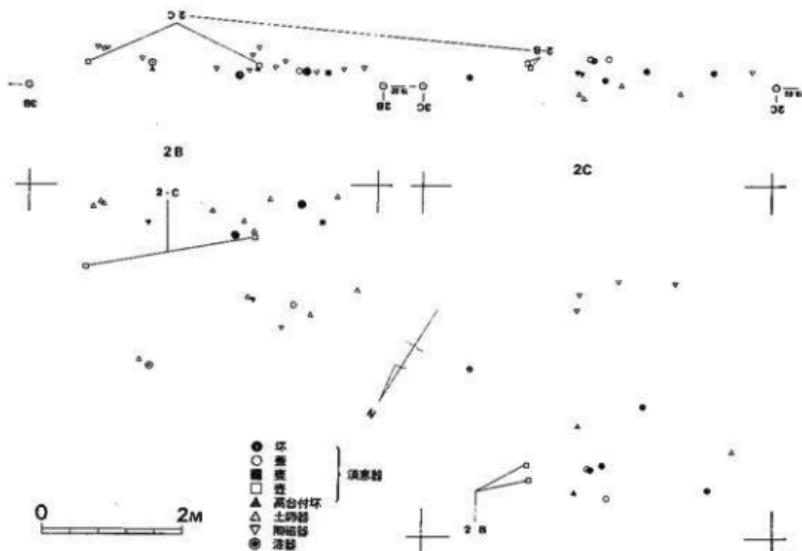
只谷II遺跡調査区配図



第9図 只谷II遺跡各グリッド土層状況

増える傾向を示す。また、段の北端、A・Bになると減少傾向になるが、これは前項で述べたように上流谷奥部からの流水によって流されたものと思われる。

第10図は、2Bと2Cグリッドの遺物出土状況で、出土数は2Bグリッドが55個体、2Cグリッドが57個体であり、そのうち須恵器は両者共に80%を越えている。この傾向はこれ以降のグリッド



第10図 2B・Cグリッド遺物出土状況

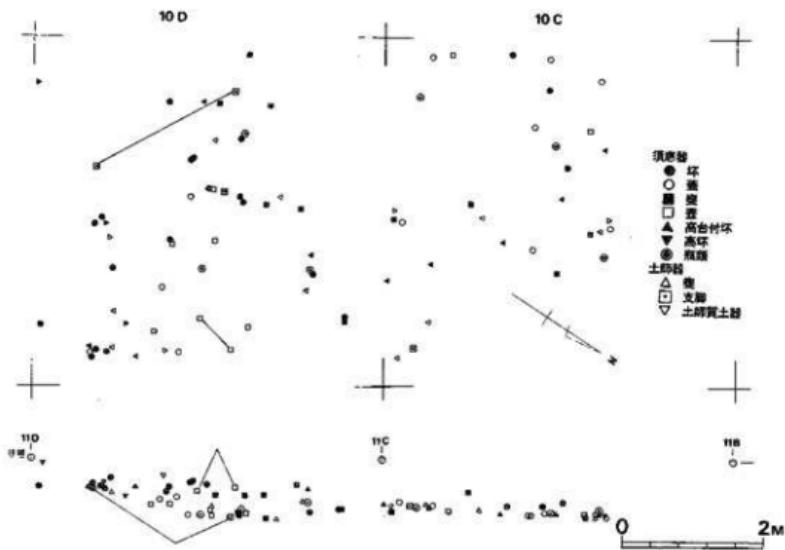
に共通しており、只谷II遺跡においては西端部のみが時期的に様相を異にするものと思われる。他のグリッドと異なり、山際の出土は非常に少なく、BとCラインにまたがる位置に遺物は集中している。また、近世と思われる陶磁器は他の遺物より高いレベルからの出土である。付記ながら、2Bグリッドからは碗と思われる漆器が出土している。

第11図は、10C・Dグリッドの遺物出土状況で、2B・Cグリッドとは違い、山際から暫時傾斜に沿った形で散布しており、出土レベル域は山際で幅が広く、低位に向かうほど狭くなっている。これは只谷I遺跡と同様の状況を示している。

このグリッドで特徴的なことは、頸部から胴部の変形やカキ目、接合痕などから横瓶、提瓶といった瓶類の出土が見られることである。このような瓶類の出土は、只谷II遺跡で10個体しかないが、8D、9D、10C・D、11Dグリッドのみに見られる。また、土器支脚は7個体のうち、9D、10C・D、13Eグリッド以外での出土はない。後者については、丘陵上に住居跡の存在が考慮される。

#### 出土 遺 物

出土遺物の総数は、1,700個体を越えるものであったが、そのうち70%は須恵器で、10%が土師

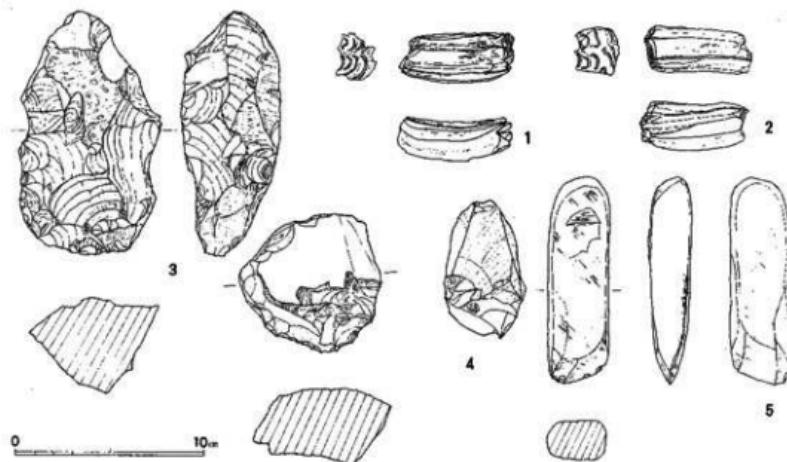


第11図 10C・Dグリッド遺物出土状況

器、土師質土器は5%に満たなかった。

第12図は上器以外の遺物で、1・2は馬齒である。馬齒は計6個出土しているが、7C・8Bグリッドのみ出土している。いずれの馬齒も全面にビビアナイト<sup>注9</sup>が付着しており、臼齒と思われる。根端は1を除いて遺存していなかった。1は頬側現歯高6.0cm、歯冠長2.4cm、歯冠幅1.8cm、2は頬側現歯高5.75cm、歯冠長2.4cm、歯冠幅2.4cmを測る。井戸内から出土するなど水に関係する祭祀<sup>注10</sup>に使われたとされ、農耕儀礼との関連で殺馬行為が行われたとするものや歯・骨の呪力信仰による<sup>注11</sup>ものなどの説がある。今回の場合、臼齒以外の出土がないことや根端の遺存する頬側現歯高が小さいことなどから若馬と思われ、前者の説に一致するものと考えられる。3・4は黒曜石塊。3は長さ13.2cm、4は7.6cmである。黒曜石の出土はこれ以外にない。5は9Dグリッドから出土した磨製石斧で、全面を丁寧に研いでおり、全長11.1cm、幅3.3cm、厚さは2.34cmを測る。

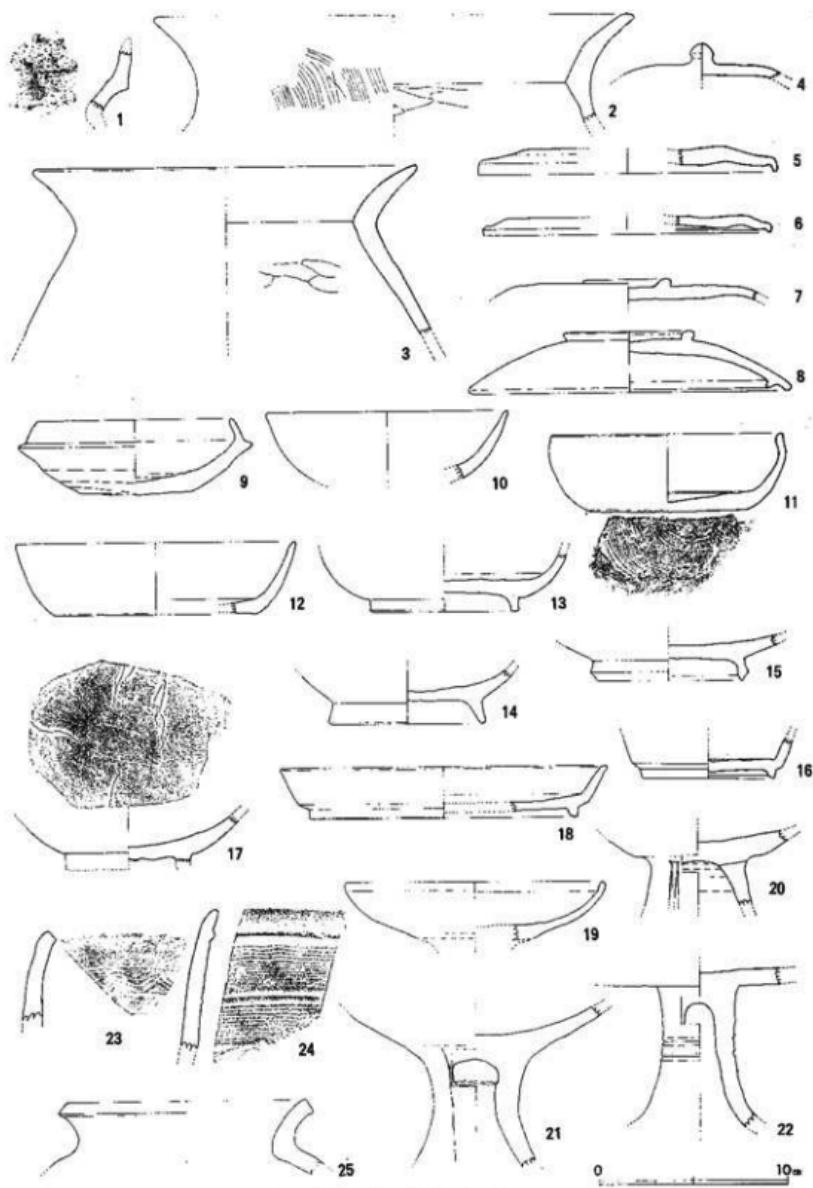
第13図1は弥生時代後期の甕形土器の口縁部で、口唇部を欠いている。口縁外面に櫛描沈線文を4条以上施しているが、摩耗が激しく不明瞭である。弥生土器は合計8片の出土があるが、いずれも後期のものである。2・3は土師器の甕で、12Eグリッドから出土した。2は推定口径25.2cmで、外面は頸部から縦位に粗目の刷毛目（8本単位）を施し、内面は胴部を横位にヘラ削りする。3は推定口径20.2cmで、外面の調整は不明だが、内面は横位にヘラ削りを施しているようである。



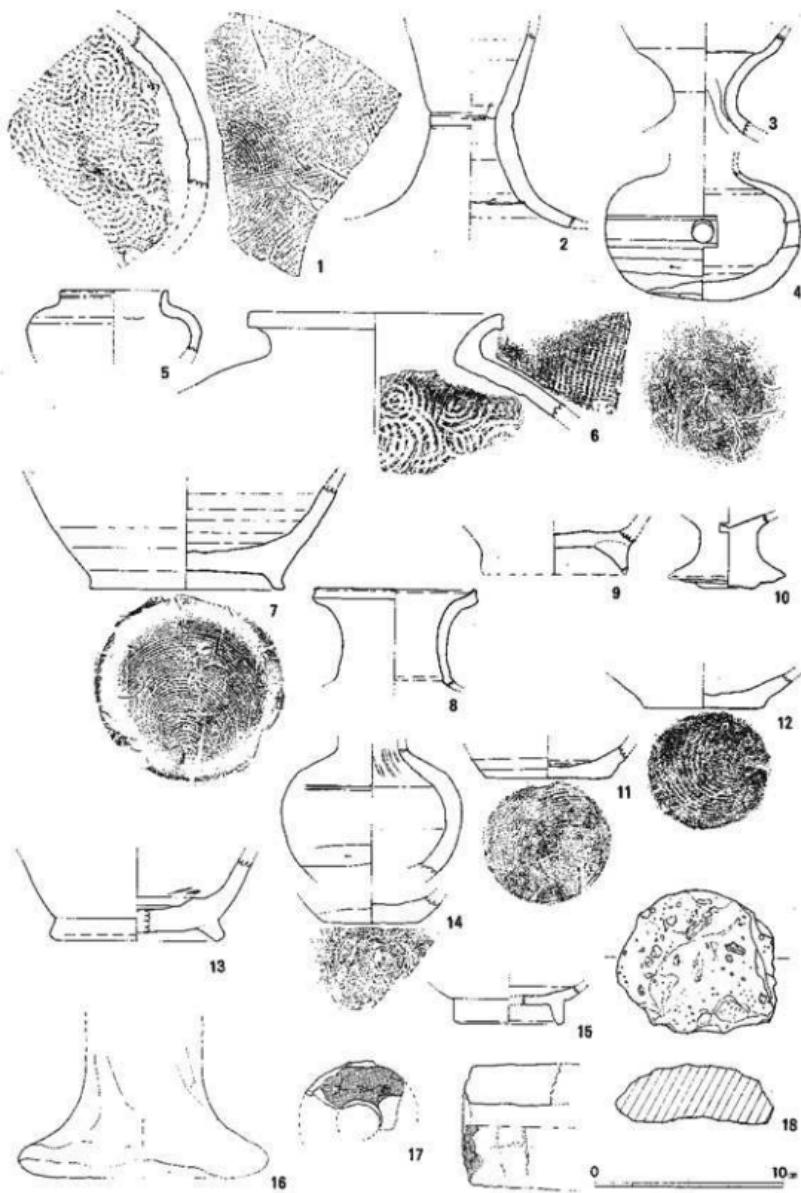
第12図 只谷II遺跡出土遺物(1)

4以降は10を除いて、すべて須恵器である。4~8は蓋で、4は3Cグリッドから出土した小さな宝珠形のつまみをもつもの。宝珠径1.4cm、宝珠高1.1cmを測る。5・6は口縁部を垂下させる類のもので、6は5より退化した印象を受ける。5は推定口径15.8cm、13Dグリッド、6は15.3cm、8Bグリッドからの出土である。7・8は輪状形のつまみを有するもので、内面を回転ナデの後に軽く横位にナデて仕上げている。7は9Cグリッドからの出土で、つまみ部径は4.7cmである。8は口縁部にかえりをもつもので、2Cグリッドから出土し、推定口径16.9cm、器高3.3cm、つまみ部径7.0cmを測る。右回転ロクロを使用している。9は環身で、推定口径10.4cm、器高4.0cmである。体部外面をヘラ削りし、底部のみ回転ヘラ切り後、雑にナデている。

10は土師質土器の坏で、推定口径12.9cm、黄橙色を呈する。11・12は須恵器の坏で、11は推定口径12.3cm、器高4.2cm、底部回転糸切り未調整、底部内面は回転ナデ後、横位にナデている。10Dグリッドからの出土。12は9Dグリッドから出土し、推定口径14.8cm、器高3.9cmを測る。底部の調整は不明である。13~17は高台付坏で、13は推定高台径8.0cm、焼成不良である。14は外面全体に自然釉のかかる、高台径8.0cmの内面を最終調整でナデしているものである。15は高台径7.2cmで、右回転ロクロ整形である。16は高台高0.5cm、高台径7.0cmを測る底部から屈曲して体部に至るもので、底部回転ヘラ切り後、雑にナデ調整を行っている。17は推定高台径6.7cmで、内面は回転ナデ後に横位のナデを施し、「丁」のヘラ記号がなされている。それぞれの出土位置は、13が6C、14が3C、15が12E、16・17が15Eグリッドである。



第13図 只谷II遺跡出土遺物(2)



第14図 只谷II遺跡出土遺物(3)

18は台付皿で、推定口径17.4cm、器高2.7cmを測る。焼成不良で、オリーブ灰色を呈している。9 C グリッドからの出土である。19~22は高坏で、19は推定口径13.7cmの回転ナデ調整の坏部である。20は脚内面空間の広いもので、一方は狭い方形の透かしが入るが、反対側は切れ込みがされるという変わったものである。21は切れ込みでなく、2本1対の浅い沈線のみ入れるものである。22は坏部が平坦で、脚部中央に2条の凹線を入れるもの。このような形態の高坏は、大田市松田谷横穴Ⅱ群<sup>注18</sup>6号穴、益田市大溢道跡などからの出上があるが、出雲地方ではほとんど見られないものと思われる。19は3B、20・22は10D、21は12Eグリッドからの出土である。

23・24は壺の口縁部で、23は2条の沈線の上下に4条位の櫛描波状文を入れている。24は隆起文と、2条沈線の上下に9条以上のほとんど直線化した櫛描波状文を入れる。25はその形態から瓶類と考えられる口縁部で、推定口径12.6cmを測るものである。9 D グリッドから出土した。

第14図1も瓶類で、内面の接合痕から横瓶と考えられる。外面には同心円のカキ目が施されており、11Dグリッドから出土した。6も10Dグリッドから出土した横瓶で、外面には叩き目とカキ目が、内面は叩き目が残る。2は10Dグリッド出土の壺頸部で、やや深い2条の凹線を入れ、内溝気味に口唇部へ至る形態と思われる。7は高台をもつ壺の底部で、右回転糸切り未調整、高台取り付け後、回転ナデを加えている。2 B・C グリッドからの出土で、高台径10.4cmを測る。13も壺底部で、高台径は推定で9.2cm、底部切り離し後、回転ナデ調整を行っている。8は壺の口縁部と思われるもので、推定口径8.4cm、15 E グリッド出土である。5は有蓋の小型短頸壺で、推定口径5.6cm、最大幅9.3cmのものである。これも15 E グリッドからの出土である。

題は3個体しか出土しなかったが、3・14は8 B・C グリッド、4は12Eグリッドから出土した。3は推定頸部径3.4cm、回転ナデ調整を施す。4は最大胴部径10.3cm、中央に径1.2cmの孔が穿孔してある。孔直上に沈線があり、胸部下半はヘラ削りがなされ、底部に「×」のヘラ記号をもつ。14は接合できなかったが、同一個体と考えられ、孔部を欠いている。胸部上半に2条の浅い沈線があり、下半はヘラ削りされている。最大径は9.7cmで、底部に「#」のヘラ記号をもつ。

9~12は土師質土器で、9は高台付坏、10は台付皿、11・12は回転糸切り未調整の坏である。10は皿部内面中央を凹ませている。いずれも摩耗が著しい。15は直立する高い高台をもつ中国製白磁の碗で、推定高台径6.0cm、内面と外面の一部に釉がかかる。内面に段を作出している。12世紀代<sup>注19</sup>のものであろう。10C グリッドからの出土である。16は10Dグリッド出土の上製支脚で、脚部径は推定で13.3cm、脚底部はヘラ削りがなされている。17は13Dグリッド出土の羽口で、推定径は6.8cm、孔径は2.2cmを測る。炉側部の破片で、先端が黒色ガラス質に変質している。18は鉄滓で、炉底部の浹曲している部分のものと思われる。羽口は7 B、8 C、11D、12E、13D・Eの各グリッドからの出上があり、そこに対応するように鉄滓が出土している。

### (3) 三部八幡下遺跡

三部八幡下遺跡は、圃場整備工事立会中に、円形木枠が現れ発見された遺跡で、湖陵町大字三部1100-1番地に所在する。姉谷川河口から約900m上流の西岸部にあり、旧水田面の標高は4.9~5.0mである。川までの距離は100mあり、川際の水田標高は3.3mである。

この西側丘陵上には三部八幡宮があり、その丘陵一体は20穴以上あるといわれる八幡宮横穴墓群が存在する。

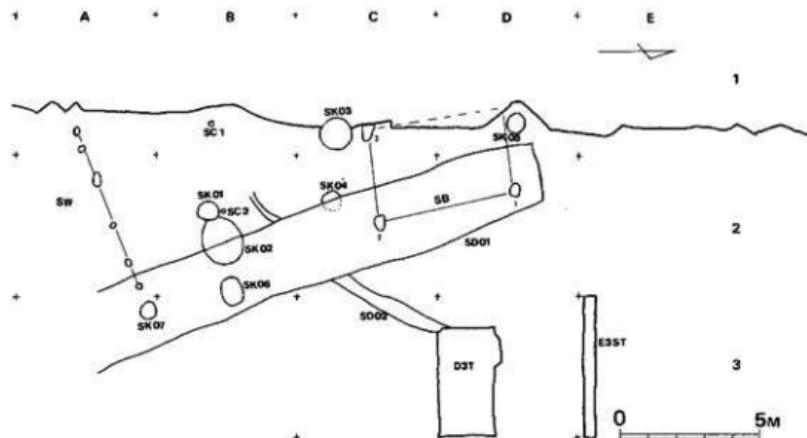
#### 調査区の設定

調査区の設定としては、遺跡の西にある町道に打ち込んであるポイントを基本軸として、5m四方のグリッドを設定した。この基本軸は、磁北に対して3.0° 東に振っており、南からA~E、基本軸から東に1~3のグリッド番号をつけた。重機で10cmほど剥いだのみだが、耕作土のすぐ下が遺構と思われ、早速、手掘の作業に移行し、木枠の部分の清査から調査を開始した。

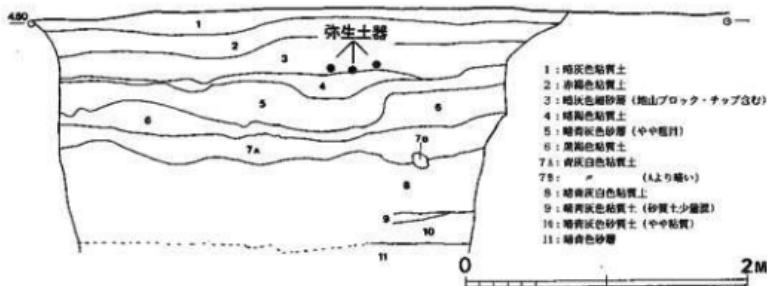
#### 土層状況

調査開始直後から遺構の存在と共に、周辺から須恵器等の遺物が散布している状況が明らかとなつたため、土層状況を把握するため、D 3 トレンチ（第15図・D 3 T）を設定した。第16図はそのトレンチの南面の土層状況図である。

1・2層は、土の混在が観察でき、耕作土と思われ、中に中世の土師質土器、古墳時代後期以降の須恵器などが含まれている。3層は厚い堆積の粗砂層で、下層部分はやや粗目の中砂があり、こ



第15図 三部八幡下遺跡遺構配置図



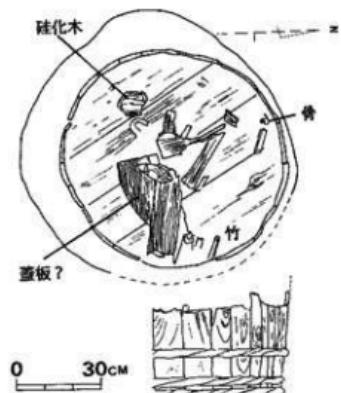
第16図 D 3 トレンチ断面土層状況

これから弥生時代後期の土器が出土した。4層以下からは遺物の出土がなく、7層以下は地下水による還元で、青灰色を呈している。また、表土下約2m、標高2.8mまで掘削したが、地山に到達しなかった。

島根大学の中村唯史氏に調査を依頼したところ、湖沼底の堆積が認められず、土層中の砂層などは河川や流水などによる公算が高く、例えば5層は6層を押し流す形で侵入している。また、弥生時代後期以降のある時期に、瀧汲などの治水が完備されたことによって姉谷川は安定し、耕作可能な地になったのではないか、との所見を得た。<sup>注17</sup>

#### 遺構の概要

第15図は、検出された遺構の配置図で、土坑や溝、柱跡、柵列跡などが見つかった。



第17図 SK 01 実測図

SK 01は最初に見つかった円形の木枠で、当初木棺墓ではないかと考えられた。第17図は暗褐色粘質土の覆土を取り除いたところで、円弧をもつ蓋板と思われるものが陥落しており、北隅に骨と思われるものが出土した。これを島根医科大学の田中教授らに検討していただいた結果、骨ではあるが、人骨の組成ではないと判断され、墓ではないことが判明した。底板径77cm、外枠最大径83cmの規模で、残存している深さは36cmで、底板は7cm上げ底座になっていた。底板は4枚の板を断面円形の竹製模2本で繋いであり、側板22枚を竹製の枠紐3本で固定してあった。枠紐は幅2cmの竹3本を撫っており、底板付近を2重にしていた。

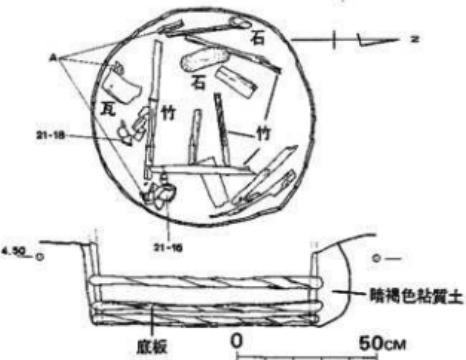
遺物は前述したもの以外に、竹材や板材が折り重なるように出土したが、土器等の出土はなかった。

SK 05 は同様の構造をもち、規模もほぼ同じであったが、底板の接合に使用された楔の形状が扁平形で、棹紐の摺りの方向が逆であった。中には SK 01 同様に板材や竹材が多数あったが、石、瓦、土器類(21図16・18)、金属片なども出土した。両者とも摺り方が明瞭に観察でき、SK 01 は大きめに掘られていたが、SK 05 は實際に掘られていた。

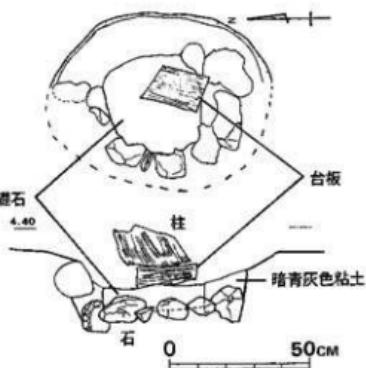
以上の状況を考慮すると、埋設桶と考えられ、広瀬町富田川河床遺跡などで見つかっているものと同じものと考えられる。

土坑は計 7 基検出されたが、SK 02 は SK 01 に接して存在する径 180cm、深さ 35cm の円形のものである。切り合い関係は確認できず、木材の 1 点が SK 01 に突き抜けていたことなどを考慮すると、SK 01 と同時に作られたか、付随して作ったものと思われる。中には木材、竹材等の他に、擂鉢(第21図17)、楕(21図19)等が出土した。SK 03 は径 125cm、深さ 70cm の擂鉢状を呈する上坑で、中には楕(21図20)の他は石が大量に詰め込んでいた。人為的に埋められたことが観察できた。水田床土上面から掘り込まれており、出土物から、18世紀後半以降と考えられる。SK 04 は深さ 20cm で、溝(SD 01)に切られており、SK 06 と共に遺物は出土していない。

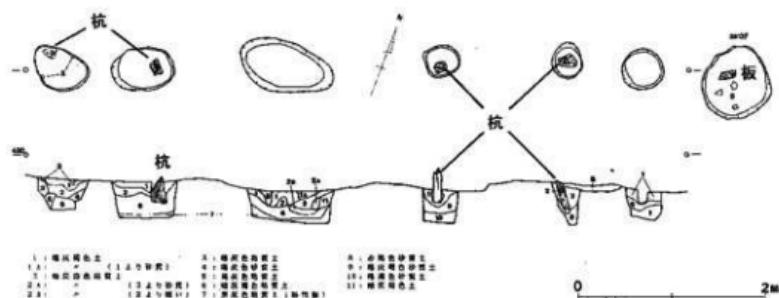
南側からは東西 6m に渡って伸びる柵列跡を検出した。柵柱は 6 か 7 本で、間隔は 80~130cm と一定ではないが、直線状に並んでいる。柱が残存しているものもあり、須恵器の出土があるが、後から混入したものと思われる。また、東側で須恵器の出土した SK 07 があるが、15cm の深さしかなく、覆土も違うため柵列跡の繋がりではないと判断した。さらに、北側にやはり柱穴痕(SC 1・2)があったが、方向も違い、



第18図 SK 05 実測図



第19図 SB-1 柱穴跡



第20図 棚列跡 (SW)

棚列柱とは対応しないものと思われる。

S K 03と05に挟まれた区域に柱穴が3穴見つかった。19図はそのうちの一つであるが、大きな礎石の脇を地山石等で固め、その上に台板を敷き、柱を据えている。他の穴も同様の造りであったが、台板を使用していたものはこれだけであった。軟弱な地盤上に1間×1間以上の建物を建てたと考えられるが、町道の下に続くと思われるため、詳細は不明である。明治時代の絵図などから建物跡が存在したという確証を得られなかった。

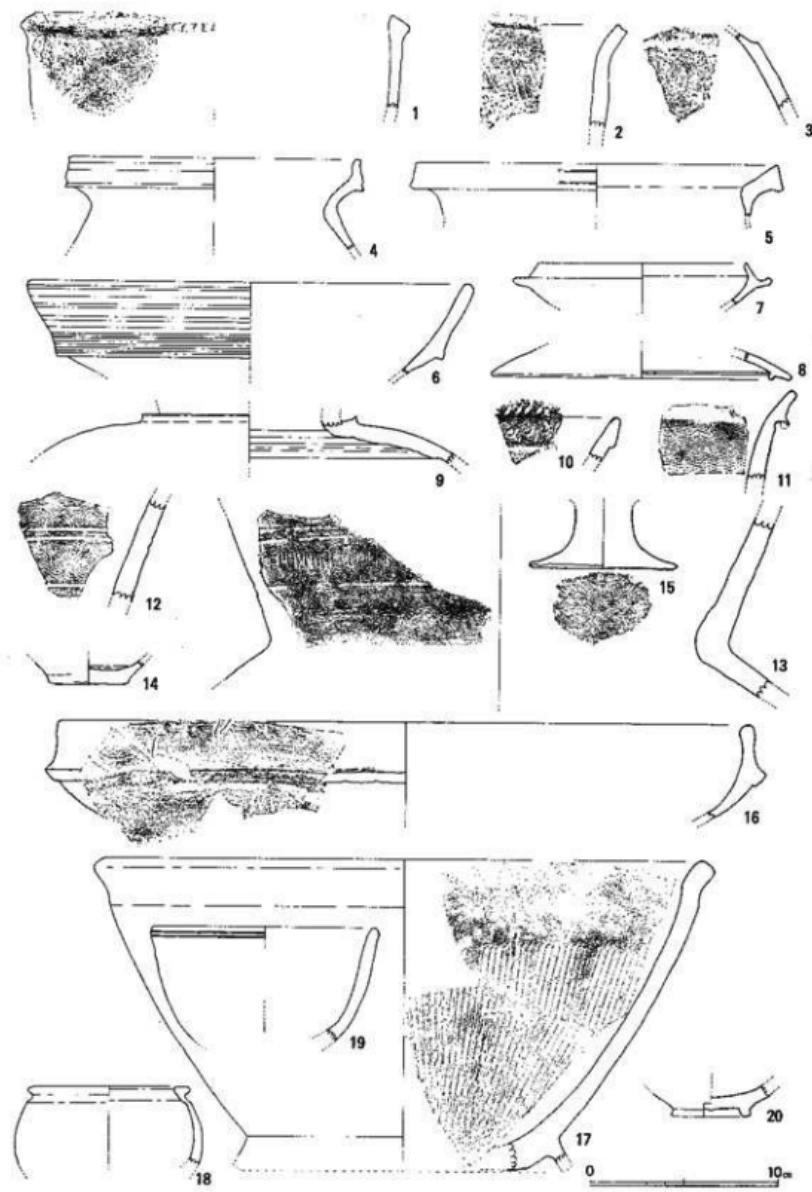
他に溝 (SD 01・02) があるが、非常に新しいものと思われる。

#### 出土遺物

前述した遺構からの遺物のほかに、散布していた遺物が多く出土した。第21図1は縄文時代晩期の突堤文土器で、突堤状に刻目を入れている。推定口径19.1cm、摩耗が激しく他の調整は不明である。2は弥生時代前期の甕、3は壺肩部で、2は調整不明、3は外面に段を作出し、ミガキを行っている。4・5は弥生時代後期の甕で、4は推定口径15.4cm、D 3トレンチ出土で、口縁に3条以上の沈線を入れている。5は推定口径19.2cm、2条以上の櫛描沈線を入れ、F 2グリッドから出土した。6は弥生時代終末期の器台器受部で、多重の環凹線が施されている。推定口径23.2cm。<sup>19</sup>

7~13は須恵器で、7は推定口径11.0cmの坏身。非常に薄い器壁をもつ。8は工具で抉るようにかえりを付けた蓋で、推定口径15.8cmを測る。9は頸部と胴部境に突出する段をもつ甕と思われるものである。10は甕類の口縁部で、外面に櫛描波状文で、口縁部内面に斜位の刺突文をもつ。11は甕の口縁部で、細い突帯の下に深い凹線を入れ、その下部に多重の櫛描波状文を入れる。12も甕の口縁部で、7本以上1単位の櫛描波状文の間に2条の沈線を入れている。13は推定頸部径24.5cmの甕で、口縁部に沈線の間に非常に細かい櫛描波状文を入れるもの。

14は上師質土器の坏で、底部径4.0cm。摩耗が激しく、外面の調整は不明だが、内面は回転ナデを

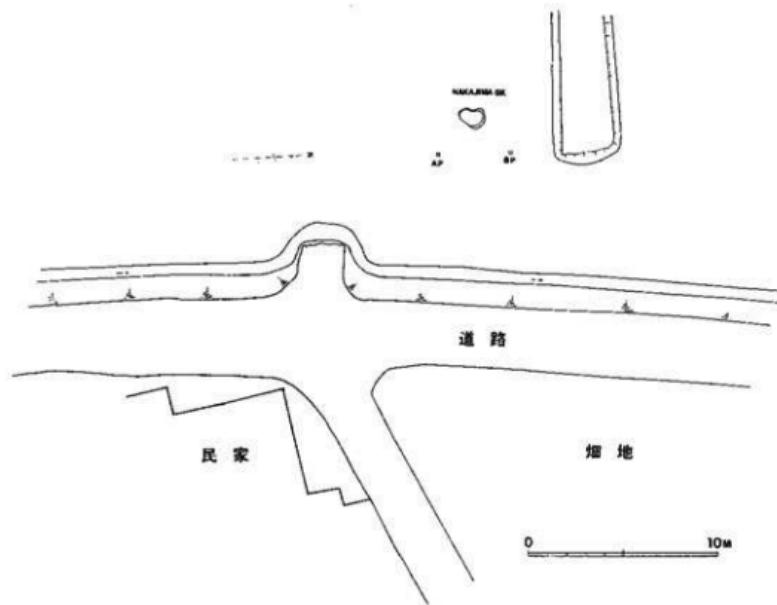


第21図 三部八幡下遺跡出土遺物

行っている。15は台付皿の台部で、推定台部径8.0cmを測る。底部は回転糸切り未調整である。16は土師質の上鍋と考えられるもので、SK 05からもう1個体（第18図A）出土している。推定口径36.8cmで、外面は2次焼成を受け、煤が付着しており、腹部は器壁が剥離している。17はSK 02から出土した硬質の擂鉢で、推定口径32.0cm、推定器高16.7cm。内面縦位に9本1単位の刻線を入れ、暗赤褐色の釉がかかる。18はSK 05出土の極暗褐色の釉がかかる小型壺で、推定口径8.6cmを測る。19はSK 02出土の推定口径11.8cmの陶胎染付の碗で、口縁外面に灰藍色の2条線を入れている。20はSK 03から出土した布志名窯の高台碗で、底部は回転ヘラ切りされ、薄緑色の釉がかかっている。2次焼成を受け、煤が付着している。

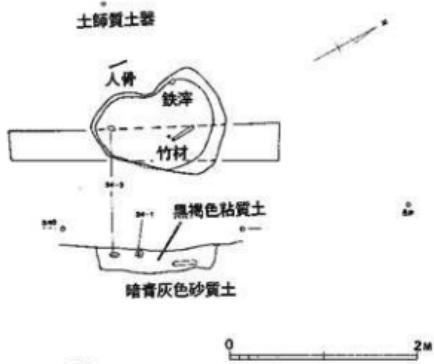
#### (4) 中島下遺跡

中島下遺跡は、姉谷川河口から900m遡った東岸の水田に位置し、湖陵町大字三部951-1番地に所在する。圃場整備中に、腕の橈骨と思われる部分が発見され、そのため工事を途中でストップし、緊急に発見位置を中心に調査を行うことになった。圃場整備前の水田面の標高は3.9mである。



第22図 中島下遺跡遺構配置図

### 調査の概要



第23図 中島下土坑実測図

清査を試みたところ落ち込みが見られ、黒褐色粘質土の覆土を取り除いていったが、遺構の立ち上がりが不明瞭なため、サブトレンチを設定した。検出した遺構は、長軸145cm、短軸70~110cmのいびつな瓢箪形のプランをもつ上坑で、深さは確認面から25cmであった。遺物は覆土内上面から土師質土器3点が出土し、下面から鉄滓と竹材が出土した。人骨等の出土はまったくなかった。また、

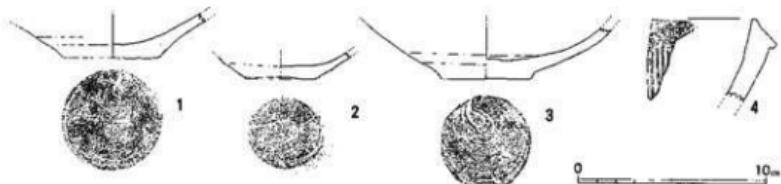
人骨発見位置は西に30cmずれており、この土坑に伴うものか明確にできなかった。

土坑周辺域を観察したところ、広範囲にわたって、中世の上師質土器や古墳時代後期以降の須恵器、須恵質の擂鉢、常滑と思われるもの、打製石斧などを採集した。

### 出土遺物

第24図1~3は、上坑内から出土した土師質土器で、1は底部径5.0cmの楕である。左回転糸切り後、未調整で、体部は回転ナデが行われている。2は左回転クロ整形の皿で、底部径3.7cmである。3はやはり左回転糸切り未調整の楕で、底部径は4.8cmを測る。いずれも口縁部を欠き、全体を窺うことができないが、底部が小さく、薄い体部が大きく広がることなどから、12世紀代のものと考られる。<sup>注20</sup>

4は表張した須恵質の擂鉢で、口縁部外面は暗褐色、以下は青灰色を呈するもの。内面縁位に刻線を入れている。室町時代前半頃のものと考察される。<sup>注21</sup>



第24図 中島下遺跡出土遺物

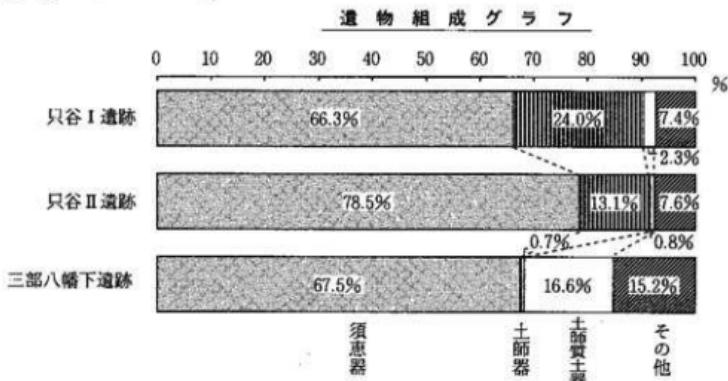
## 5. まとめ

以上のように、発掘調査を行った4か所の遺跡と試掘調査のみの2遺跡について、簡略に述べてきたが、これらの遺跡をまとめると、次のような。

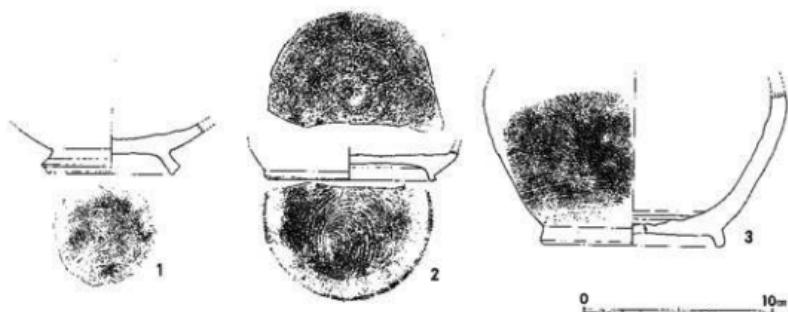
調査方法	遺物出土レベル(標高)	遺構の有無・時期	各時代の消長				
			縄文時代	弥生時代	古墳時代	奈良・平安	鎌倉・室町
只谷I遺跡	発掘 7.406 ～8.268	なし		—	—	—	—
只谷II遺跡	発掘 8.908 ～10.266	なし		—	—	—	—
結合道比須遺跡	試掘 4.80 ～5.86	なし	—	—	—	—	—
保知石谷遺跡	試掘 3.66 ～7.54	あり 近世(江戸?)			—	—	—
三部八幡下遺跡	発掘 4.160 ～4.605	あり 近世(江戸)	—	—	—	—	—
中島下遺跡	発掘 3.00 ～3.85	あり 中世(10C)	—	—	—	—	—

ここで留意しておきたいことは、縄文時代後半から続く遺跡であっても、弥生時代中期に途絶えてしまうことである。これらの遺跡はいずれも低湿地に立地していること、中島遺跡の存在等を考慮すると、この時期には丘陵上に生活圏が移ることも考えられる。<sup>注22</sup>

次に土器の組み合わせについて考察してみると、只谷I・II遺跡、三部八幡下遺跡の出土遺物の組成は次のようになっている。



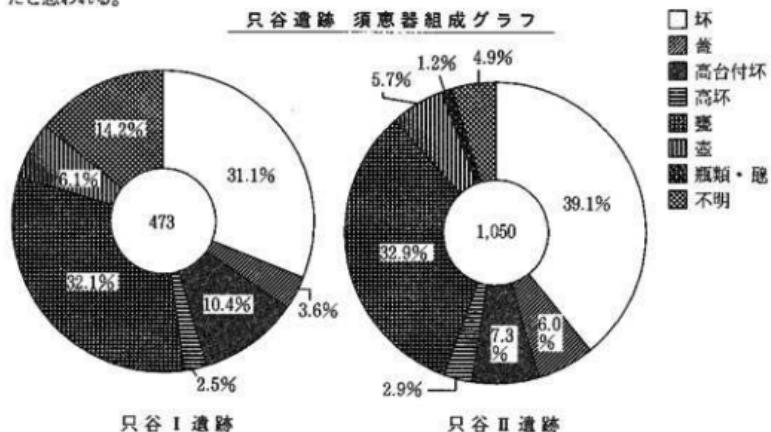
ここで使用した遺物は個体数であるが、甕片等大型品は当然ながら個体を明確化できなかった。また、器種の不明なものは除外している。傾向として、只谷I・II遺跡は土師質土器が少なく、三部八幡下遺跡は土師器が少ない。上記消長表を見ても、時代的な差を示しているとは明確には言え



第25図 只谷遺跡 ヘラ記号をもつ遺物

ないが、これは、生活圏の立地条件によるのではないだろうか。「三部八幡下遺跡」で述べたように、ある時期を境に姉谷川は安定する。この安定期に、この地を生活の場として進出してきたため、この組成の突出が生ずるのではないか。残念ながら、今回の調査ではそれを示唆し得る遺構等を検出できなかったが、今後、この周辺域は慎重に対処しなければならないと思われる。

次に須恵器の器種組成を検討してみたい。次のグラフを見るかぎり、組成の割合に変化は見えないようである。しかし、只谷II遺跡で出土している瓶類、甕がI遺跡ではまったく見られないこと、また、II遺跡は壺、蓋が若干多いことがわかる。これらのことから遺跡の性格の違いを導き出すことは無理であるが、馬齒と桃種（図版6）の出土からII遺跡において、祭祀的な活動が行われていたと思われる。<sup>注23</sup>



最後に、両遺跡ではヘラ記号をもつ須恵器が7個体出土したが、第25図1はII遺跡の15Eグリッ

ドから出土した高台付坏で、高台径7.4cmを測るものである。底部切り離し後高台を付け、回転ナデ調整している。2は、I遺跡ST5から出土した高台径9.2cmの非常に薄い高台をもつもので、内面全域に「米」の印がなされる。底部は回転糸切り未調整である。3もST5から出土し、高台をもつ壺で、高台径は9.8cmである。胴部の底部近くに「サ」のヘラ記号がなされている。  
月24

## 注 記

- (1) 杉原清一「庭反II遺跡・他-昭和61年度調査報告書」湖陵町教育委員会(1987)
- (2) 杉田徳幸ほか「神奈川地区県立園芸場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書(御須出遺跡・三郎竹崎遺跡)」湖陵町教育委員会(1994)
- (3) 松山弘吉「山雲における古墳時代前半期の土器の様相・火薬式の再検討-」『鳥取考古学会誌』第8集(1991)
- (4) 三梨 勝・徳岡隆夫編「山海・穴道網・地形・低質・自然史アトラス」鳥取大学山陰地域研究総合センター(1988)付録「鳥取県地質図」鳥取県地質図編集委員会(1982)
- (5) 山本信夫「北都九州の陶器器編年(30世紀後半~14世紀前半)」『第1回鳥取陶器研究会資料』(1994)
- (6) 浜田市教育委員会の原 裕司・神原博英氏に、浜田市吉市遺跡出土遺物を拜見、御教示いただいた。
- (7) 山根正明「駿府駿と周辺の中世城館について(1)」『町誌研究2』湖陵町教育委員会(1993)
- (8) 15Eグリッドの須恵器中の壺の割合は、80%を越えており、只谷II遺跡全体の割合は、34%でしかない。
- (9) Vivianite(藍鉄鉱: ガラス状の薄青い結晶体) 上肥一孝「日本古代における犠牲馬」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会(1983)
- 00 前掲書9上肥(1983)。守間正司氏には馬車について様々な御助言、御教示をいただいた。記して感謝申し上げる。
- 01 桜井秀雄「井戸から出土する牛馬造存体について-動物犠牲との関係-」『考古学研究』第39巻第2号(1992)
- 02 この中で土肥氏は、頗る現島高や摩耗などから馬齶が推察可能だとされ、若馬であるということは故意に駒馬し、投入したものと据えておられる。しかし、当遺跡の出土状態は、原位置を保っておらず、積極的に述べることはできない。
- 03 人間晴道・勝部 昭はか「大田市松田谷窪穴群」鳥取県教育委員会(1982)
- 04 西尾克己・熱田保保ほか「石見空堀建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書」鳥取県教育委員会(1992)22は、环部の形態から、これに非常に類似している。
- 05 同心円カキ目底のみでは、瓶頸であるという確証はない。山裏市三田谷II遺跡では、蓋外側にカキ目が施されているものが出土している。鳥谷芳雄・永井宏昌ほか「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書I-二田谷II遺跡・上沢I遺跡-」鳥取県教育委員会(1994)1区山土遺物。
- 06 西尾克己氏の御教示による。前掲書5山本(1994)
- 07 中村氏は、「潮沼底の堆積上が河川の氾濫によって流出してしまった、という点も考慮すべき」とも述べておられる。
- 08 石井 悠・西尾克己ほか「富田川河床遺跡発掘調査報告書-Ⅰ-」鳥取県教育委員会(1983) S X 028・030・031・032など。蓬岡治暉・村上 男・川原利人・トロ吉博ほか「富田川河床遺跡発掘調査報告」広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡調査團(1977)の本稿に当たると想われる。
- 09 いわゆる九重式と呼ばれるものである。東森市良・前島己基・松本岩雄「弥生式土器集成」「八雲立つ風土記の丘研究紀要」I(1977)
- 10 広江耕史「鳥取県における中世土器について」『松江考古』第8号(1992)
- 11 西尾克己氏の御教示による。
- 12 しかしながら、湖陵町内で、現在弥生時代中期の遺跡・遺物はまったく確認されていない。
- 13 前掲書9上肥(1983)
- 14 ヘラ記号については、大川 清・田辻昭三・中村 清氏らの論議があるが、大川氏の仕説説が最も妥当と思われる。大川 清「福井県益子町瀧ノ入窯址調査報告」『古代』19・20合併号(1956)。また、中村氏はヘラ記号を「○」「×」「+」「-」「—」などに分類できるとされているが、「×」と「ト」の区別是不可能ではないかと思われるし、工人集団の窯内での区分けという説を、記号の差に調整系が認められること、から述べておられるが、その調整系を詳しく検討されていないのは残念である。
- 15 中村 浩「和泉陶邑窯の研究」柏青房(1981)

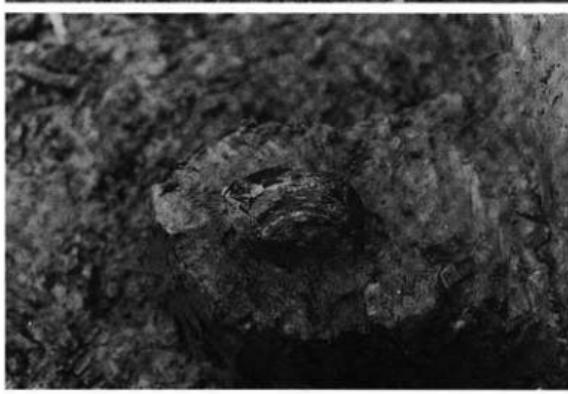
図版 1



保知石谷遺跡木棺墓



只谷 I 遺跡  
高台付杯出土状況  
(8 b グリッド)

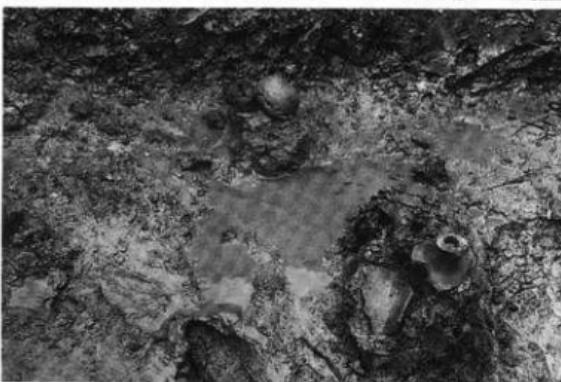


漆器椀出土状況  
(6 b グリッド)

図版 2



只谷 II 遺跡  
高台付杯出土状況  
(2C グリッド)

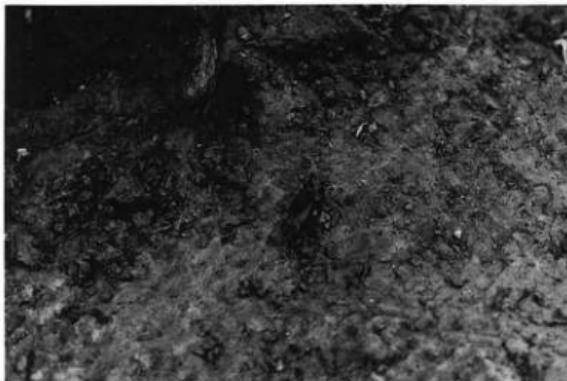


12E グリッド  
遺物出土状況



国内産青磁?  
出土状況  
(3日 グリッド)

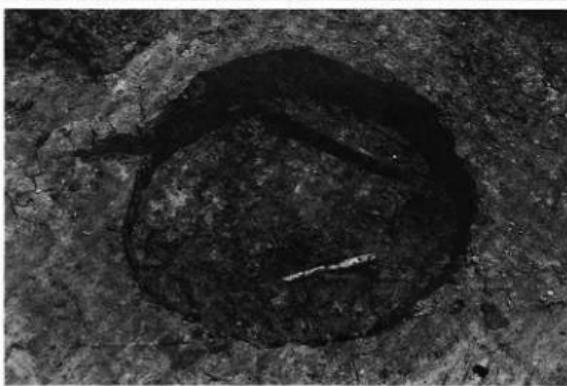
図版 3



只谷 II 遺跡  
漆器出土状況  
(2B グリッド)



15E グリッド  
遺物出土状況



三部八幡下遺跡  
SK01

図版 4



三部八幡下遺跡

SK01

柵紐状況



SK05



SK02

図版 5



三部八幡下遺跡  
柱穴跡  
(SB-1)

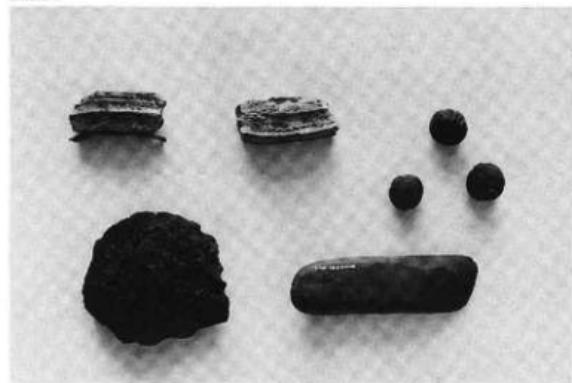


柵列跡  
(西から)



中島下遺跡  
土 杭

圖版 6



只谷 II 遺跡

出土遺物

馬齒 桃種

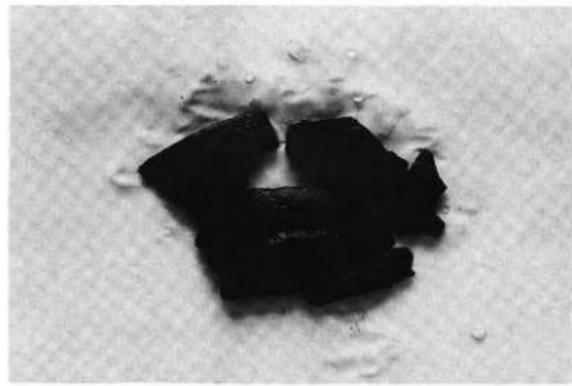
鐵淬 石斧



黑曜石塊

砾石 凹石

(I・0 b) (II・15 E)



漆器挽

(I・6 b)

神南地区扫一手育成基盤整備事業に  
伴う埋蔵文化財調査報告書(第5工区)

只谷 I・II 遺跡

三部八幡下遺跡

中島下遺跡

1995年3月

発行・編集 湖陵町教育委員会  
島根県簸川郡湖陵町二部1320  
印 刷 松江市西川津町667-1  
松栄印刷有限会社